

《第23回全国ホタテ大手荷受・荷主取引懇談会》開催概要

- ・日 時 平成29年5月24日（水） 15:00～18:10
- ・場 所 ロイトン札幌 3階 「ロイトンホール」
- ・出席者 来賓：7名 荷受：51社 84名 商社：16社 28名
生産者代表：10組合 20名 関係団体：2団体 2名
荷主：48社 66名 その他：2名 報道機関

I 開 会

II 主催者挨拶 代表理事会長 宮崎 征伯

- ・ ホタテの生産は、噴火湾、オホーツクともにある程度回復すると予想。
- ・ 生産がV字回復した場合、この数年で内販から離れたが、どう消化していくか危機感を持って、対応しなければならない。需要の掘り起こしが重要課題になる。
- ・ 研究機関で行っているウロが資源回収の有効な手段となる可能性の研究を期待している。

III 来賓挨拶

○ 大都魚類株式会社 代表取締役社長 青木 信之 様

- ・ 北海道のホタテ漁業はMSC認証も取得し、世界から認められた国際商品。安定した生産があれば、国内外のマーケットは活況を取り戻せると期待している。
- ・ 築地の豊洲市場移転については、いまだ解決の方向が見えない状況。一刻も早く方向が明確になり、安全・安心はもちろん、諸問題解決に努め、新しい卸売市場のページを開き、全国の産地出荷者の皆様の期待に応えていきたい。

IV 来賓紹介

V 講 演

演 題 「ほたての生産・流通動向等について」

講演者 北海道漁業協同組合連合会 販売第一部長 瀬川 直樹 様

VII 全体討議（総合司会：㈱長谷川水産 長谷川社長（副会長））

1 ボイル・冷凍ボイル部門（進行：㈱丸太水産 坂本社長（理事））

- 昨期は、業務筋向けなどの需要が底堅く、中心サイズはある程度販売できた。今期はあまりの価格高騰について来られない取引先が増え、マーケットの縮小を懸念。色々なチャンネルを探って、5年後を見据えた販売努力が必要。
- ここ数年、原貝価格は中国主導で決まっている。今年はそれが日本のホタテ業界にとって良いのかどうか、深く考えるよいきっかけになったのではないか。
- 冷凍両貝については、3月後半から日本産の輸出が止まった。中国で消費が進むような価格形成をしなければ、来期も輸出にブレーキがかかると懸念。

2 生玉・玉冷部門（進行：北見食品工業㈱ 田中社長（理事））

- 今年のホタテは例年になく小さく、冷凍両貝に向かいやすかったことが背景にあると思われるが、浜値の高騰もあり、4月まではほとんど玉冷を作れなかった。
- 今期の玉冷販売は、輸出が厳しい見通し。また、来年はオホーツクの前貝が回復見通しということもあり、今期は内販の拡大が重要。
- 来年増産の見込だが、これまで伸びてきた輸出に陰りも見えており、国内マーケットが重要となる。今年からそのための流通の整備をお願いする。

VIII 閉 会